

脊髄損傷（以下、脊損）は本人・家族、さらに周囲の人々にもその後の人生に多大な影響を与える重要なリハビリテーションの対象障害である。その障害は多面的で、初期のリハビリテーションから生涯にわたる包括的ケアが必要となる。リハビリテーションにかかわる医療者はチームで対応するが、障害は重く、対応の範囲は広く、要する知識は膨大で、医療現場での身体的・精神的負担は大きい。わが国で専門的リハビリテーション医療を展開できるリハビリテーション施設は限られている。

神奈川リハビリテーション病院は脊損リハビリテーションの長い歴史と多くの経験があり、高度な技術と知識を持つわが国有数の施設である。本書にはその技術・知識・経験が全ての領域にわたって記述されている。本書は優れた現場の技術書であり、同時に脊損リハビリテーションの全貌を知ろうとする者にとっては絶好の教科書である。

本書の初版の序の冒頭には「この本は実践の技術書である」と編集者の志が示されているが、今回の第3版もこの姿勢が貫かれると同時に、新たな技術・知見が盛り込まれた最新の内容になっている。写真・図を多用しビジュアルに理解を促進するという配慮がなされており、読者は脊損リハビリテーション全般の知識とその全貌が理解できると同時に、リハビリテーション医療が対応する分野の広がりや深さに気付かされる。医療現場の医療文化やリ

ハビリテーションに向かう姿勢をも発信されているように思える。

脊損の発生状況は変化しつつあり、現在は高齢者の四肢不全麻痺が多数を占める状況となっている。高齢者に対しては各地域の施設でリハビリテーション治療が行われることが多いが、脊損に対する経験があまりない医療者は心理的な負担を感じていると聞く。そのようなときも本書は高齢脊損者のリハビリテーション医療にも触れられているので絶好の技術書となり、各施設の脊損リハビリテーション技術・知識の普及・向上に役立つだろう。

また脊損医療の現在の関心は再生医療にあるが、それが本格的に開始された後も社会復帰には地道なリハビリテーション訓練を経なければならない。その際にも本書に記述された内容は有用であり続けられると思われる。

脊損リハビリテーションの現場では医学的エビデンスを明らかにできない医療も実際行われている。本書は医療者が抱くそうした疑問に合理性のある記述で応えている。

読みやすく考慮されており脊損リハビリテーションの入門者にはもちろん、脊損リハビリテーションに現在かかわっている医療者にとっても技術や知識の確認・整理に最適の書である。

（B5 頁336 2019年 定価：本体5,200円＋税
[ISBN978-4-260-03696-2] 医学書院刊）